

札

一、右同字兩燒印 夜中御城中より出入立歸候者之札  
一、八角之内通の字 諸御奉行人へ相渡人足并町人・職人 往來札

一、丸之内極の字 内作事奉行召仕候人足札  
一、角之内金の字 御能之刻御樂屋へ相請候人々  
一、丸之内能の字 各所  
印 足輕・小者

一〇 御城近火之節罷出候者御定

一、御城近き火事之時分は、早鐘つかせ可申候。然者前々より相定候、御城中請取之所々被罷出衆は、尤參出可有之候。其外之衆中には不被罷出管に候間、此旨何茂被承知候様可申談旨前田駿河守被申渡。

元祿十年四月初日

一一 城中御番人自宅近火之節

罷歸儀御定

覺

一、若火事之刻、御城中所々當番人之内宅、類火敷又は隣家等に候者、夜中に而も代之番人待受可罷歸候間、其趣被聞届可被相通事。

一、惣而火事之節は、請取之所々に罷出候不依人々、其品被聞届、隨時宜可被裁許之旨、前々より申渡有之儀に候得共、彌可被得其意候事。

右之趣河北・石川兩御門御番之與力中へ茂可被申渡候。以上。

(享保十一年)  
丙午六月廿六日

奥村伊豫守

三之御丸御番人衆中

一二 御城下火事之節御城門

往來御定

以上

御城下火事之砌、御城に罷出候面々供之者、御定之外は河北・石川・甚右衛門坂之下三ヶ所に差置可申候。若火本に遣候様に被仰出候者、何れに而茂手寄之御門より罷出者可有之候。依之石川御門に差置候家來、河北御門・土橋御門相通

候儀茂可有之候。甚右衛門坂下に指置候家來、土橋御門・石川・河北兩御門通候儀茂可有之候間、主人斷次第聞届、鐘・乘馬并火消道具等、不依晝夜無滯相通候様、兩所御番之與力中へ可被申渡候。以上。

(享保十一年)  
丙午六月廿八日

奥村伊豫守

三之御丸御番人衆中

一三 火事之節二之御丸當番

御馬廻頭御定

覺

一、火事之刻、二之御丸當番御馬廻組頭一人、三之御丸御番所へ罷出、大横目申談、御番之御馬廻石川・河北兩御門に罷出、參出候面々召連候供之人數等相改、萬端作法能様に可申付旨可致裁許候。所々御土藏奉行は、早鐘に無構火事之様子見合、其役所々々に罷出候様可被申談候。以上。

閏八月八日

御馬廻組頭衆中

大横目衆中

一四 城中足輕番人夜中  
病氣之節御定

御城中所々足輕番人、夜中若病人等有之時分、右御番所より段々申送、割場迄案内有之管候間、河北・石川兩御門下番之足輕共へ申渡置候様、兩所御番之與力中へ可被申渡候。以上。

(正徳五年)  
乙未八月四日

前田美作守

三之御丸御番人衆中

一五 火事之節諸奉行人等城門

往來御定

諸奉行人  
御用懸之面々  
當番人

右若御城近火事之砌、其役所々々に罷出候間、斷被聞届、雖爲夜中、河北・石川兩御門無滯相通候様、御番之與力中へ可被申渡候。以上。